昭和女子大学現代教育研究所紀要　第 8 号　21～32（2023.3）

古典をめぐる学びの冒険
～ドラマ手法で「古典世界」にダイブせよ！～

青木　幸子（現代教育研究所所員　全学共通教育センター）

1．はじめに

本研究は、国語教師を目指す学生たちの「ドラマ手法を用いた古典授業」の実践と考察である。ここでいう「ドラマ手法」とは、ある役になって考えたり演じたりしながら実感をもって学ぶ学習方法である。本稿では、国語科教育法（古典教材）にフォーカスし、授業過程を描出・分析し、「なってみる」ことで古典世界に迫る、学びの冒険の成果と意義を明らかにしていきたい。

2．「ドラマ手法de古典」研究の経緯とねらい

2-1　古典世界にタイムトリップ～ドラマ手法で、ワクワクをつくりだせ～

国語教材の中でも古典教材は他とは趣を異にし、ともすると古典文法や口語訳に終始しがちで、それが高校生の古典嫌いをひきおこしていることが、各種の調査報告からも明らかである。そんな中「高校生をいかにして古典世界に誘うか？」その仕掛けの探究から、筆者の高校教師30年にわたる古典改革はスタートした。はじまりは、教師が清少納言になり演じる〈ティーチャー・イン・ロール〉で「古典世界にタイムスリップ」から。

●ティーチャー・イン・ロール

> 清少納言（青木）「みなさん、ここ、平安時代にようこそ。私は清少納言、1000年以上の時の彼方から、この平安時代においでくださったみなさんをアテンドするのが、私「清少納言」のミッション。私が、アテンドということで、ご紹介するのは、ほとんどが「平安女子」のいる宮中…もちろん、私たちのサロンには、中の関白ファミリーをはじめとする、たくさんのエグゼクティブ男子が登場なさいますので、おりおり、ご紹介します。メインフィールドは、ずばり、私の御主人さまでいらっしゃる「中宮定子さま」のサロン。そこで、起こったいろいろなエピソードを書いたのが私の「枕草子」。みなさんにとって、ここ、1000年前の世界、っていうと、遠い世界、って感じかもしれませんが、実はここには、みなさんが生きる令和の暮らしをスキルアップするようなヒントもたくさんあるんです。恋のメールテクニックとか、人間関係のサバイバル術とか、婚活話とか…（中略）

筆者は全ての古典教材の導入で、ティーチャー・イン・ロールの技法を使い、生徒達を王朝世界に誘った。イメージ世界と現実世界の往還で、古典世界への関心を深める中「古典に登場する女性達が、一堂に会したらどうなるかしら」という生徒の一言が契機となって、生まれたのがラジオドラマ【あさき夢見し　いつの世も】。架空実況放送【あさき夢見し　いつの世も】は右大将藤原済時の小白河山荘の現場中継からスタートする。

【あさき夢見し　いつの世も】

F. I（雅楽）

NAR	私は今、右大将藤原済時様の小白河山荘に来ています。今日、六月十八日から四日間、ここで、小白河の法華八講が行われます。連日の猛暑の中、今日も、日中カンカン照りが予想されるように、朝から空は晴れ上がっております。前評判の高かった行事だけに、まだ、露も乾かぬ夜明け前から、山荘には貴族の車が、ぞくぞくつめかけています。おやっ、向こうの菩提樹の下に奇妙ないでたちの少女が走り回っています。F. O
乳母	姫様もう姫様ったらあ、何のためにここにきたと思ってるんですか？有難い、お話を聞いて
虫愛づる姫	だって、ここは、虫の宝庫なんだもん、ほら見て、これ、新種の毛虫よっ
乳母	こんな所にきてまで、殺生なさるなんて、情けない
虫愛づる姫	私は、殺生なんてしてないわ、毛虫を可愛がっているだけじゃない！！
NAR	髪はボサボサ、眉毛は黒々、笑うと真っ白な歯がのぞく、この方が有名は、虫愛づる姫君のようです。乳母につられて、しぶしぶ、法華八講にいらしたようです。SE（牛の鳴き声）
NAR	あっ、ちょうど今、争うようにして二台の牛車が入ってきました。先頭の唐庇の車には、中宮彰子のようです。今ちらりと、紫式部さんの姿も見えました。続いての牛車は、定子中宮様のようです。何やら、二台の間で言い争いが始まったようです。

2-2　授業デザイン～ドラマ手法で、古典の世界にダイブせよ！～

実践現場を高校から大学へ移した筆者は、2012年度より、国語教師を目指す学生たちとドラマ手法を切り口とした古典授業の実験的挑戦をスタートした。「古典は、品詞分解ばかりでおもしろくない」「将来使うことがないから興味がわかない」そんな高校生たちをワクワクさせるにはどうすればよいかという筆者の問いに、学生たちはこう答えた。「もし、自分が、古典の世界にワープできたら、本気になれるかも」「じゃあ、ドラマ手法で古典世界にタイムスリップしたらいい！」「国語科教育法」受講学生たちは、筆者の「教職概論」で、ドラマ技法（渡部淳＋獲得型研究会2010, 2014, 2015）を駆使し、対象世界に迫り、テーマ理解を深めた経験をもっている、それが「古典授業改革」の切り札となり、ここから「ドラマde古典」の学びの冒険は、始まったのだ。

3　実践の概要

国語教師を目指す学生たちが、ドラマ手法を使って、ダイナミックな学びの世界を経験する「ドラマde古典」のロードマップから紹介しよう。とりわけ汎用性がある技法が次の6つである。**フリーズ・フレイム**：身体を使って、あるイメージを写真のように表現する技法。**ロール・プレイ**：自分ではない、他の人・モノを演じる技法。**ホットシーティング**：登場人物に「なって」ホットシートに座り、質問に答える技法。**専門家のマント**：学習者が専門家に「なって」説明する技法。**ティーチャー・イン・ロール**：教師自身が登場人物に「なって」学習者をドラマ空間に誘う技法。**思考の軌跡**：登場人物が考えていることを、その人物になったままコトバ・身振りで表現する技法。（個々の技法の詳細な解説、実践事例は、拙稿（2009, 2011, 2013, 2014, 2015）に譲る）。

授業計画：ロードマップ		
1	1.1. テーマ	ドラマde古典～古典世界にダイブせよ！～
	1.2. 目標	古典世界にリアリティを感じ、学びを深める授業を体験する。
	1.3. 内容	架空実況放送【あさき夢見し　いつの世も】を聞き、**ニュースショー**形式で紹介する。
2	2.1. テーマ	竹取物語～かぐや姫の昇天が意味するもの～
	2.2. 目標	竹取物語のエピソードをもとに、「物語」のもつ多様なメッセージを読み解く。
	2.3. 内容	**ホットシーティング**を使って、昇天前のかぐや姫の心情に迫る。
3	3.1. テーマ	枕草子～GO TO 平安、ガールズトークに参戦せよ～
	3.2. 目標	中宮定子をめぐる藤原一族の物語をベースに枕草子が意味するものを考察する。
	3.3. 内容	清少納言への**インタビュー**から、「中の関白家・卒業アルバム」という認識に到達する。
4	4.1. テーマ	枕草子～くらげの骨から学ぶのはスタイリッシュな切り返しだけじゃない～
	4.2. 目標	清少納言の機知の披瀝とみなされがちなエピソードから新たな発見を行う。
	4.3. 内容	くらげの骨のエピソードを**ロールプレイ**することで、人物像を浮上させる。
5	5.1. テーマ	源氏物語～桐壺の更衣とスクールカースト～
	5.2. 目標	恋愛をも支配する絶対的なものである身分社会に対する考察を深める。
	5.3. 内容	「教室内スクールカースト」の**インプロ**のち、登場人物の**ホットシーティング**を行う。
6	6.1. テーマ	更級日記～サラの語るライフストーリー～
	6.2. 目標	更級日記の概要を理解すると同時に、物語に没入する作者の心情理解を深める。
	6.3. 内容	**専門家のマント**を使って更級世界に誘い、「こじらせアラフォー女子」の真実に迫る。
7	7.1. テーマ	虫愛づる姫君～自分らしく生きるということ～
	7.2. 目標	古典世界におけるアバンギャルドな姫君を通し、自分らしく生きるとは？を考える。
	7.3. 内容	**フリーズフレーム**で「虫愛づる姫君」に迫り、CM制作を通し、姫君の思いを表現する。
8	8.1. テーマ	百人一首～歌物語をつくろう～
	8.2. 目標	和歌の重要性を認識し、和歌創出の想像力と創造力について考察する。
	8.3. 内容	和歌創出のプロセスを**即興ミニドラマ**で演じた後、和歌の創出背景を考察する。
9	9.1. テーマ	伊勢物語～ドラマで演じると世界が変わる～
	9.2. 目標	フィクションの中にある真実を表現する方略としての「和歌」考察する
	9.3. 内容	「筒井筒」の**ドラマ化**で、解釈の差異、そこから生まれる新たな物語の可能性を感じる。
10	10.1. テーマ	平家物語～忠度都落とメメント・モリ（死を想え）～
	10.2. 目標	死は消滅でなく他者の記憶として生き続ける限り存在することの認識を理解する。
	10.3. 内容	**ホットシーティング**で忠度に迫り「あなたは何をのこしますか」を４コマで表現する。
11	11.1. テーマ	方丈記～３・11と方丈記をつなぐ～
	11.2. 目標	「体験」によって、「死」と「生」が地続きであることから無常観を理解する。
	11.3. 内容	３・11の苦難を歌で結晶化させた人として、方丈記の舞台を**架空実況**する。
12	12.1. テーマ	ユーモア＆シニカルな兼好法師の知性に迫る～探偵スクープ・ザ・兼好法師～
	12.2. 目標	徒然草という作品の魅力を様々な角度から分析し、兼好法師の人間像を創出する。
	12.3. 内容	**専門家のマント**で兼好法師を取材し「あの人に会いたい」番組構成を企画する。
13	13.1. テーマ	徒然草「猫又world here we go!」～**ホットシーティング**で僧侶に迫れ！～
	13.2. 目標	徒然草における人間観察の鋭さと描写の巧みさを理解する。
	13.3. 内容	**ホットシーティング**で、猫又事件の真相にせり、内容理解を通して、兼好の思いに迫る。
14	14.1. テーマ	奥の細道～架空実況放送・ガイドツアー～
	14.2. 目標	芭蕉はなぜ旅をしたのか、彼にとって旅とはいかなるものであったかを理解する。
	14.3. 内容	アナウンサーになって「奥の細道」**架空実況放送**を行う。
15	15.1. テーマ	あの人に会いたい～古典の世界にダイブせよ！～
	15.2. 目標	古典世界を自身の現実とリンクしながら想像＆創造、そこから古典の冒険は始まる。
	15.3. 内容	古典世界をめぐる冒険の中で、興味関心を抱いた人を**ニュースショー**として発表する。

古典世界の学びを深めるため、実践では古典研究の専門家（中野貴文：学習院大学教授）と共同し、古典研究と教育の架橋の可能性も模索した。実践を筆者が実況中継し、そこで起きた出来事を古典研究者と共に分析検討することで、古典授業改革の一つの可能性を提示してみたい。

3-1　百人一首で歌物語 授業実践①（＊太字 学生の言葉）

青木：今日は、皆さんと一緒に、和歌をめぐる冒険に挑戦です。さっそくですが、みなさんに質問です。平安時代に生きる人々にとって、歌って、どんなものだったって思う？「**和歌は今でいうメール**」「**ラブレター恋文**」「**好きな人にいいよる手段**」「**モテるために必要なもの**」「**何かに感動した時に、それを表現するもの**」いろいろでてきましたね。まさに、みなさんの想像のように、平安時代の人々にとって、和歌は生活における必須アイテム。そして、その和歌の効用について、ズバリそれを文章化してくださったのが紀貫之の古今和歌集の仮名序、まずそれを読んでみましょう（中略）「**思いを表現する**」「**読んで相手の心を動かす**」そう、和歌は、気持ちを表現し、相手を動かす、最強のコミュニケーションツールだったというわけです。が、ここで実は、とっても大切なのが、詠まれたシチュエーションを知ること。「**たしかに～**」「**そうだよね**」受け手は、あるシチュエーションの中で、その和歌を受け取るわけですから、短い言葉にこめられた思いも、共感をこめて想像し、解釈ができるわけです。ということは、シチュエーションや文脈と切り離して和歌にこめられた想いを理解することは、ほんとうは難しいんですね。でも、言い方をかえれば、そのシチュエーションを知らないからこそ、想像をふくらませ、自分なりの解釈が許されるともいえますよね。そこで、今日は、みなさんに、〈歌物語を創る〉にチャレンジしていただきたいんです。つまり、和歌の生まれた情景や想いを想像し、それをしっかりふくらませて、物語を創っていただきたいんです。まず、最初の歌は、「あひみての　後の心に　くらぶれば　昔はものを　思はざりけり」「**あ～知ってる**」「**百人一首で覚えた**」そう、百人一首で有名な歌ですね。解釈も含めて、グループで話し合って、きっとこんなシチュエーションだよっていうのを創って、それぞれ、演じてもらいたいなあって思います。たとえば、登場人物は？どんなシーン？何が起こってるんだろう？何を思ってるんだろう？伝えたいのは、どんな想い？とか、いろいろみんなで話しあってね。短いけど、10分以内で話し合ってOKじゃあスタート」

話し合いのシーン

A「会って見るって」B「まあ、両想いになるってことじゃない」C「そうか、で、その両想いになってからの気持ちに比べると、昔はなんも考えてなかったって、やっぱ、恋の話じゃん？」D「そうそう、だったら、考えるとか、思うって、相手のことをいろいろ思って辛くなったり、切なくなったり…」A「そうだよ、だったら、今は、もう、両想いなんだよね、会って見てるんだから、その両想いになってからの気持ちと、昔の…片思い？の時にあれこれ思ってたときの気持ちをくらべたら」B「今の方が辛いってこと？わっ、ぜいたく…」C「確かに、まあ、恋をしてない人とか、好きな人がいない私たちにとっては、めちゃくちゃ贅沢な悩みやん…」B「で、どうする…なんとなく、全体は、わかったような気がするけど」A「ちょっと、もう一回内容を整理しようよ」（中略）A「うちらみたいに、恋愛してない人よりも、体験者が語るっていうのがいいよね」B「それいい、それいい、めちゃめちゃリアルじゃん」A「じゃあ、この歌を詠むのはカナンちゃんでどう？いい？」C「え～う～ん、いいけど」B「決まり、もう、いいじゃん、台本とか、なしで、うちらみんなが、あれこれ、友達のカナンちゃんに恋の行方について、聞いてるシーン、そのままやろっ」

発表

A「ねえねえ、昨日一緒居たの、彼氏？」C「うん」B「わあ～いいなあ、ね、つきあって、どのくらい？」C「ちょうど、二か月目かな、明日が…」D「わー記念日なんだあ、いいなあ、アニバスリーとか、やるの？」C「うん、ひと月目はやった」A「いいなあ、で、どう？もう、毎日ハッピーいぇーって感じ？」C「ううん？」B「えっ、なんで？ラブラブなんでしょ？」C「なんだけど、付き合いだしたら、それはそれで、いろいろ悩みが増えて…」D「えっ、わかんなーい、どうして？」C「彼ね、東大生なんだ」A「え～いいなあ、いろいろ教えてもらえて」C「うん、それはいいんだけど」B「で？」C「付き合う前はさ、サークルであって話すだけだから、ちょっとちょっとの情報しかなくって。あ～出身は福岡なんだ…。弟がいるんだあ…高校の時は、サッカーやってたんだ…ってちょっとずつわかっていって、ますます、いいなあって、いろいろ想像して、で、付き合いだしたら、今まで知らなかったことが、いっぱいわかってきてね」D「いいじゃん、彼の一日がいろいろわかって、うれしいじゃん」C「なんだけど、例えば、一緒にゼミにいる女子の話とか、ぽろっとでるとさ」A「あっ、気になるんだあ～一緒に実験とかやって、帰り遅くなったら一緒に帰ったりとか」C「そうそう、実験データとる時間ってハンパないから、時々オールとかもあるみたいなの」B「あっ、それやばい、二人きり？」A「ちょっと、美紀ちゃんたら」C「いや、二人っきりじゃなくてチームだから、もっといるけど、でも、その子はいつも一緒にいるわけじゃん」A「そうか、カナンちゃんよりも、物理的に一緒にいる時間が長い日も多い」C「そうそう、だから片思いしてる時の、なんにも、彼の一日の様子とか知らないときの方が、もっと楽だった…今は、勝手にあれこれ想像して、ひょっとして、おなかすいたから一緒にコンビニにいくか？とか、待ってるときに、色々なこととか話したりとか、彼女の悩みとか、聞いたりとかさ」B「やっぱ、時間と空間ともにするって大きいもんねC「だから、最近のほうが、辛かったりする、一緒に過ごした後も、ちょっと大学によって実験データチェックして帰るわ…って言ったりすると、なんか泣きそうになって…今の私の気持ち、歌ってみます。あひみての　後の心に　くらぶれば　昔はものを　思はざりけり

（拍手と歓声）

青木：ありがとうございました。リアルで、自然なトークひきこまれましたね。この恋が実れば、あとは楽しいことばかり…片想いの時はついつい楽しいことばかりを思い浮かべるけど、実際に恋を手に入れると、それと引き換えに今まで知らなかった感情が芽生え始める。一緒にいるときにふと感じる不安、会話や相手の態度に対する嫉妬、カナンさんの、本音が、あひみてのに結晶化されている気がしました。実際にこの歌を詠んだのは、権中納言敦忠という男性ですが、歌にこめられた想いは、きっと同じですね。続いて、もう一首、挑戦してください。その歌は、「玉の緒よ　絶えなば絶えね　ながらへば　忍ぶることの　弱りもぞする」です。それでは、どうぞ」

話し合いのシーン

A「私好きこの歌」B「私も」A「意味はさ、 私の命よ、絶えるなら絶えてしまえ」B「自分に？」A「死ぬがいいって、いうより、死にたいっていうかんじだよね」D「そう、その方がふつうだよね」A「なんでかっていうと、このまま生きていると」B「忍ぶることの　弱りもぞする」D「もぞ、もこそって、めっちゃ先生が強調してた」A「～すると困るから」A「このまま、生き続けると、忍ぶ、我慢する気持ちが弱まるのが困るから…」B「我慢するって」C「恋心でしょ？」D「我慢するっていうか、恋心抱いちゃいけない相手ってこと？」A「たぶんね…やばいよね、恋心をこんなに隠さなくちゃいけないって…」B「周りにばれると困るっていう恋ってこと？」A「相手に、自分の思いを知られるのが困るとも考えられるけど…」C「なんかさ、つんでれの女の恋心って感じ？」D「ああ、プライド高いから、決して好きな思いを、相手には感じられたくないっていうか」B「うーん、それもありよね」A「まいちゃんは、どう思う？」C「私は、やっぱり、好きで好きでたまらない相手がいるけど、それを相手に知られてはいけないから、ぐっとたえるっておもう…」（中略）

発表

D「ちひろ、黒板ふきお願いね」C「いいよ」（黒板を一生懸命ふいてる。上が届かない。ちょっと、ジャンプしたり…いきなり、上をふきはじめる拓也）あっ、拓也、ありがと」B「ちひろ、ちびっこだから、むりやん」C「ひど～い、どうせ、ちびっこだよ」B「何センチ？」C「154」B「ちっちぇーなあ」C「拓也は？」B「おれは、180」C「いいね、どこにでも手が届くじゃん」B「まあな、だから黒板ふきは得意。で、家、どうよ」C「うーん、まあ、まだ、ぐたぐたっていうか、すぐには、無理だよね、なんてったって、女性問題だもんね、母さんの気持ちがさ」B「まあな、でも子どものできることって、なんもないっていうか…じっと我慢することぐらいでさ…だから、こうやって黒板がんがん消してきれいにするみたいに、嫌なこと、どんどん消してしまうのがいいよ」C「ありがと、拓也」

それから一週間後、学校の帰り道

A「もう、ちひろ、聞いてよ。拓也ったら、また、約束キャンセルだよ」C「約束？」A「そう、図書館で一緒に日曜勉強しようっていってたのに。また、部活の練習入ったからって」C「部活じゃしかたないよ」A「えっ、でも先週もだよ、練習試合やら、とにかく、部活部活、もう、全然一緒にいられないんだから、つきあってる意味ない、もう、別れようかな」C「そんな、拓也いいやつじゃん」A「まあ、いいやつなのは、認めるけど、だから、好きになったし、でも、一緒にすごす時間がないんじゃ、意味ないもん」C「でもラインとか、電話とか、話できるんでしょ？」A「うん、まあね」C「拓也、いつも、ゆりの話、一生懸命聴いてくれてるじゃん、教室移動の時とかも…」A「うん、確かにね…昼休みとかは、また、部活の仲間とつるんで話できないけど」C「夜も、電話で話したりするんでしょ？」A「うん、電話できないときは、後でちゃんと、かかってくるし」C「いいじゃん、拓也、やさしいじゃん、いつも、ゆりのこと大切に思ってくれててさ」A「確かにね、拓也、忙しいのにね。ありがとうね、ちひろ、私、ちょっとわがままばっか、いってたかも、後で、拓也にごめんって謝るわ～じゃ、ここでね。ありがと、ちひろ、ばいばい」（手をふりながら、ちひろが語りだす）C「私は今、泣きそうです。黒板ふき以来、私は拓也のことが気になってしかたありません。ふっと気づくと拓也のことを考えています。でも、そんな気持ちになる自分を毎日、だめだだめだと叱っています。拓也は私の大好きな友達ゆりの彼氏だから…」玉の緒よ　絶えなば絶えね　ながらへば　忍ぶることの　弱りもぞする

（拍手と泣けるっていう声があちこちからあがる）

青木：ありがとうございました。リアルな語りが胸にズーンって響きました。この作者は、式子内親王という女性、後白河上皇の皇女、皇女というのは大抵、生涯独身で過ごすものと決まっていましたので、当然、自由な恋愛など出来るわけもなく、秘めた想いに身を焦がすという、この歌の中身と響きあうことになります。よく式子内親王の恋の相手は藤原定家だと言われますが、それはまあ、後の世の人の想像の産物らしく、実際に二人は恋愛関係ではないみたいですが、この歌には、人の想像力を刺激する力があるのですね。二つの歌を演じてくださったみなさん、ありがとうございました。この授業ではみなさんに「和歌ってなあに？」っていうところから考えていただきました。「古今集仮名序」にふれて、和歌は「人の心」を「種」として、「言の葉」になったもの、「ことわざ繁き」つまり、ささやかな日々の生活の中から生まれてくる、思いが結晶化したものなのだとお話いたしました。そして、みなさんは、その和歌から感じたイメージをみんなでふくらませながら、一つのシーンを、そのシーンで語り合う人と人との思いをみつめ、表現してくださいました。みなさんが語ってくださった物語の一つ一つの言葉が、また一つの「種」として、私たちの「言の葉」が生まれるとしたら、和歌ってほんとうにすてき力をもってるなあって思いますね。和歌をめぐる冒険、歌物語を創る、今日はこれで、終わりです。ごきげんよう」

★青木：振り返り

創作活動において、学生たちは、古典世界と自身のリアルな現実をリンクさせ、歌の詠み手の心情を考察しつつ、それを解釈する自身の省察という、メタレベルの活動も行っていた。和歌からインスパイヤーされた想いが、私の中の「言の葉」を広げる契機となる、歌物語の実践の意味に学生たちは気づいていた。

☆古典研究者からのコメント

従来、高等学校における和歌の授業は、和歌（それも、万葉集・古今集・新古今集から数首ずつ）をそれが詠まれた文脈から切り離し、単独で解釈させることが多かったように思われる。三十一文字を大切に、個々の語にこだわりながら解釈することはもちろん重要だが、実際には入試対策として修辞法の説明に終わることが多いのが現状で、何より、本文中でも触れられている通り、和歌が貴族の日常的な必要性から愛されていたものであることが伝わらない憾みが残ろう。本授業では、実際にその和歌が詠まれた背景を創作するという、ある意味逆回転的な試みを実践することで、和歌における文脈（詞書）の重要性を意識させている。しかも、創作した文脈を実際に簡単に演じてみることによって、学生たちは和歌の重要性を身体的にとらえることができたのではないか。この実践では、学生たちは詠まれた実際の背景を「想像」する（そのためには、作者情報等、かなりの補助教材の準備、古典知識の教授が求められよう）ことではなく、自由に物語を「創造」することが求められていた。これによって、和歌を自分たちの経験に引きつけて理解し、古典と現代とを架橋することができたであろう。優れた和歌は、それにまつわる物語の存在を惹起せずにはおかないものである。式子内親王の歌が契機となって、能「定家」などの諸作品が生まれたことはよく知られている。逐語的に解釈することはもちろん重要だが、一つの作品から次の作品が生まれるダイナミズムを感得することも、古典文学の学習としてとても重要なことに他ならない。学生たちは、まさしく古典文学の「継承」を実践したと見なし得る。

3-2　『源氏物語』「桐壺」とスクールカースト　授業実践②

青木：では、はじめましょう。前の時間に、源氏物語の冒頭部分を一緒に読み、解釈していきました、さて、どんなお話だったか…A「**はい、たくさん帝の后候補がいる中で、帝が一人の更衣だけをめちゃくちゃ寵愛するので、ほかの女御更衣がむかつき、空気が最悪な中、寵愛を一身に受ける更衣は病気がちになります。ところが、帝の寵愛は、ますますヒートアップし、ついに、そばにいる男性陣、上達部殿上人たちも困ったことだと心痛しはじめ、更衣は、居たたまれない状況に追い込まれけど、帝のお気持ちだけを頼りに宮仕えを続けるという話**」青木「そうですね、みなさんは、そんなに、桐壷の更衣と女性たちの様子をみて、どう思いましたか？A「**いつの時代も女の嫉妬は怖いなって**」B「**一人だけ、特別ひいきされ愛されると、やっぱりいじめのターゲットになるのだなって**」C「**周りの人から嫉妬されると、本当に人を病気にまでしてしまう、怨念は怖い**」 D「**帝は彼女を愛しているから、優しくしているつもりかもしれないけど、それが逆効果で、いじめをヒートアップさせていて、一人だけえこひいきって、空気悪くするなって、特に、身分が更衣だしって**」青木：そうね、みなさんは、このシーンを読んで、恋愛における嫉妬はこわい、今とやっぱり同じと。でも、平安時代の恋愛システムからこの状況を考えると、つまり、桐壷更衣一人を帝が寵愛するのは、ルール違反、つまり最悪な状況なんです。そこで、今日は、みなさんに、源氏物語の中の女性になっていただき、この桐壷更衣をめぐる宮中の世界を感じてもらい最後に「めざましきもの」「やすからず」という、彼女たちの思いにぐーんと迫っていきたいと思います。その源氏世界にワープする前に、まず教室の、人間関係のフォーカスからはじめましょう。あのね、教室の空気の中で、なぜだか、パワーのある人がそうでない人をコントロールしたりするってことって、あった？A「**あるある、たくさんあった。一軍とか二軍とか、キャピキャピに対してジミーズ（地味ズ）とか**」B「**スクールカーストだよね**」C「**そうそう**」青木：そのスクールカーストが目に見える形でわかるのは、どんなとき？「**席かえ**」「**委員会決め**」「**文化祭の出し物**」「**修学旅行の自由行動**」青木：いっぱいあるね、じゃあ、今からちょっとグループを作って、一軍、二軍、三軍、もしくは、キャピキャピ、その下、さらにジミーズ、の役に別れて、それぞれのグループで、ある日の教室ってかんじで、シーンを決めて、即興で演じてもらえる？（五分くらいの話し合いで、役割と場面設定、決定。後はすべて即興）青木「では、最初のグループ、お願いします、これはどんなシーン？」A「**文化祭の係決めです**」

発表

A「文化祭さ、だしものきめなきゃいけないじゃん、で、うちらあ、メイド喫茶やりたいってておもうけど」B「やりたいのある、ほかある？」C「いやぁ、べつに」B「で、うちらあメイドがやりたいんだよね」A「ねえ、調理部だったよね、みんな」C・D・E「うん」B「じゃあ、調理部三人に、調理全部まかしていい？」D「ずっと？」A「うん」D「ちょっと、ほかも、ちらっとみたいかなって、ね」E「うん、ちょっとだけでも」B「え～どうよ」C「あの、当番制で、調理とメイド、当番にして、ちょこっと、どこかで、他見に行けるような」教師「みんな、決まってる？順調？」C「あの、メイド喫茶がいいなって、で、順番に当番制で…」教師「そうそう、それがいいいね、みんな、いろいろ見たいから順番っていうのは、いいね、そんな感じで進めて、ちょっと会議いくので、後よろしくね」B「ねえ、調理とかできる？」A「むりむり、できない」B「うちらあ、無理だわ、調理なんて」A「絶対無理」B「それに、うちら、回りたいとこがどうしてもあるんだよね」A「友達からチケットもらってるから、いかないと悪いし、チケット無駄になるし」B「そうそう、だから、調理は三人でやってよ」D「うん、いいよ」E「私も、調理で」C「私も…ずっと調理でいいです」A「じゃ、そういうことで、決まりね」

青木「次のグループは。どんなシチュエーションですか？」A「修学旅行、京都奈良自由行動の場所決めです」

A「修学旅行さ、どこ行きたい？」一同「うーん」A「薬師寺、超行きたい、後、ほら、10円玉の」B「宇治の平等院鳳凰堂？」A「そうそう、そこそこ、いいよね」B「うん、いいと思う、私も行きたいし」D「すごく、いいと思う」A「だよね～京都っぽいよね、ほか、行きたいとこある？」B「私も、平等院でいいと思う」A「でしょ、10円玉もってさあ、ここだよねって、で、ほかに行きたいとこある？」E「春日大社にいきたいかな」A「えっ、なにがあるの？」E「奈良で有名だし」A「ふーん、で、Cは？」C「奈良公園で鹿…」教師「どう、みんな、決まりつつ？」A「はい、3つくらいにしぼろうかなって」教師「そう、で、ごめん、今Cちゃんが言いかけてたのは？」C「奈良公園で鹿みたいなって」教師「いいねえ、鹿、奈良っていったら鹿だね、鹿も候補にぜひいれて、あっいけない会議だ、じゃ決めておいてね」A「夏じゃん、鹿臭くね？」D「うん、私も好きじゃない」E「私も、鹿、嫌かも」A「先生、めっちゃ鹿おしだったね～鹿、ね、鹿どうよ」C「いや、べつに、どうしても鹿がみたいわけでも」A「じゃ、鹿はなしってことで、いい？薬師寺、平等院って感じで」一同「うん、いいと思う」

発表後の対話

青木「みなさん、ありがとう。めちゃくちゃリアルだったね、演じてみての感じは？」B「先生、普通はね、担任はジミ～ズひいきしない」C「そう、たいていトップの一軍をひいきするよ」D「もろわかるよ、その方が先生はクラスをコントロールしやすいもん」A「それなのに、担任が下をひいきしたので空気悪くなって」C「めちゃめちゃ、とがった…私下の役やって、いたたまれなかった。ひいきやめてください、そっとしておいて、あとの仕返し、上の人からの倍返し怖いから」D「うちら、同じ下のポジションだったから、えって思った。なんで、あの子だけひいき、うちらと同じ下のくせに、そう思ったら妙にむかついたよね」E「そうそう一軍ひいきするなら、すんなり受け入れたけど、うちらと同じポジションなのに」A「まあ、うちら、一軍としては、なに、下のくせに、なにひいきされてんの、上のうちらの立場ないじゃん、担任のくせにむかつく。でも、まあ、結局クラスはうちらのいいなりだけど、バランスくずすなよ、空気読めよって、担任に言いたかった」青木「みんな、ありがとう。スクールカースト、ロールプレイとみんなの言葉でめちゃめちゃわかりました。中でも、「下のくせに」とか、「一軍ひいきするんなら、別に普通だから気にならないけど」や「バランスくずすな」っていう言葉、その役になりきった語りに、ものすごいリアリティを感じました。そこで、これからは、再び古典の世界、桐壺の世界に一緒にタイムスリップ、OKですか？」一同「OK」

ホット・シーティング　part 1　桐壺の更衣の同僚たち

青木「今ここは源氏物語の舞台、ゲストは、桐壷の更衣さまの同僚の更衣さまたち。それでは、さっそく、お尋ねします、今、桐壷の更衣さまだけが、帝からひどくご寵愛をうけていらっしゃるわけですが、それを見ての率直なお気持ちをお聞かせくださいませ。」

A「自分より位が上の方が、寵愛をうけるのなら、まあしかたないことって思いますけど、自分と同じ位の桐壷さんだけが、寵愛を受けているのは、納得いきません」

B「上の身分の女御さまたちのご機嫌悪くなり、あてつけがこっちにまできて、本当にいい迷惑です、でも、その一方で、ひょっとしたら私にもチャンスあるかもって思う気持ちもあります」

C「なんで私じゃないの、あの桐壷の更衣さん、たいしてかわいくもないし、女御の位でもないし、おかしいでしょ、女御でもないのに」

D「自分と変わらない人なのに、なんであの方だけが寵愛受けるの、更衣なのに女御様をさしおいてあつかましいわ」

ホット・シーティング　part 2　女御さまたち

青木「ありがとうございました、それでは、続いて登場していただくのは、四人の女御さまです。では、女御様お座りください。桐壷さんが、ご寵愛をうけていらっしゃるシーンをたびたび目撃なさってると思いますが、さあ、今のお気持ちをお聞かせください」

A「毎日むかむか。なんで地味で、更衣の身分なのに好かれるの、一族の期待を一身に背負っているわたしの立場ないじゃない」

B「おかしいわ、位低いのに、更衣なのよ、ランクの違いはっきりしてるのに、だから、納得できないの、更衣なのに愛されるなんて」

C「そもそも桐壷さんがちゃんと断らないのがおかしいわ、ちゃんと、ご自分の立場を踏まえて行動しないのが、私は許せない」

D「更衣である桐壷さんが、寵愛をうけたら、女御である私たちの立場がない、桐壷更衣さんは、御自分の立場を考えてほしいわ」

ホット・シーティング　part 3 桐壺の更衣

青木「続いてみなさんの、憤りの矛先となっている、桐壷の更衣さまに、おいでいただきました。今のお気持ちいかがでしょうか？」

A「うれしい反面まわりからの目がいたくて、正直なところ実は、有難迷惑的な気持ちもあります」

B「帝に好かれ嬉しいですが、その反動で他の女性たちから徹底的にいじめられるのが辛く、私をそっとしておいてほしいです」

C「私更衣なので上の人からいろいろ言われ、空気も悪くなり。でも、寵愛をやめてともはっきりもいえないし、複雑、拒否もできないし」

D「女御様から嫌われ、同僚からも、冷たくされ、もう空気が悪くなって、いまや宮中全体の空気さえもおかしくなって、本当に辛い」

青木「もう一つだけ、桐壷の更衣さまに聞いてよろしいですか？帝のことは好きですか？」

A「むこうはお好きでいてくださっても、こちらの更衣という立場を考えると…」

B「帝本人というより、帝のステイタスが絶大すぎ、今、周りを敵にしても好きかと言われると、好きっていえない空気もあって」

C「私は好きです」

D「好意はありますけど、こんな状況になるともう、周りが気にしないくらい、夢中で好きという気にはなれません」

ホット・シーティング後の青木コメント

青木：みなさん、いかがでしたか？源氏物語は、＜女の嫉妬や、情念渦巻く恋愛話というだけではなさそう＞ですね。女御さんたちがおっしゃたように、桐壺の更衣へのむかつきのベースに「更衣のくせに」っていうのがあるようですね、本文の言葉でいうと、「めざまし」。女御がむかついてるのは、自分たちは身分の高い「女御クラス」なのに、身分の低い「更衣」が寵愛されているからこそ、むかつく、最初のスクールカーストでいうとジミーズのくせにって一軍の人たちがいうのと同じ感覚かも。また、帝に対する更衣の率直な思いも、とてもリアリティがありましたよね、本来女御をさしおいて、好きなんて口にだせないっていうのが、多くの桐壺更衣の口からでていたのも、非常に興味深いものでしたね。

ホット・シーティング　part4 上達部殿上人

青木 「最後は、宮中女性世界を横でみている、上達部殿上人という、四人の方に来ていただきました。今の率直なお気持ちは？」

A 「空気乱れることが一番困るんです。仕事円滑にできなくなるし、帝も、よりによって、なんで更衣のなかから選んだりするんだろう。」

B 「帝は、国のトップなんだから、身分の低い人をひいきしてかわいがると絶対空気悪くなるのはわかっていたことです。げんに今もそうなってるし、帝の下で働く私たちの立場もふまえて、今まで通りバランスをとっていただきたい。国を乱すことしないでほしいですね」

C 「帝は、まったくもの好きだなあ、でも、身分制度を無視してでも、寵愛を続ける相手っていう、桐壺更衣を一目みたいかも」

D 「いや、ほんとに寵愛すごいですよね。ちょっとひきます」

レッスンの終わり、青木コメント

青木「上達部や上人は一見帝の恋愛とは関係なく見えるけど、宮中の空気がぎすぎすすることによって秩序の崩壊を招くことをものすごく憂えていたっていうことがわかりますね。上達部上人の男性視点も忘れていないっていうところが、源氏物語の深いところですね。今日は、その源氏の時代の宮中にみんなと一緒にタイムトリップ。それでは、ごきげんよう」

★青木：振り返り

即興ロール・プレイで「スクールカースト」を演じた学生達はふりかえりの中で言う「カーストが空気を支配する」と。その気づきが、「ホットシーティング」に座り、女御・更衣となった学生達の語りに大きな影響を与えたことは明白である。古典世界での深い学びを現実世界とリンクさせ、自身のカラダを通して、思いを自身の言葉で語る中で、学生達は、源氏物語が単なる「恋の物語」ではないことに気づきはじめたといえよう。

☆古典研究者からのコメント

『源氏物語』「桐壺」を、桐壺帝と桐壺更衣との深い絆、愛故に孤立する二人、周囲の女性の嫉妬といった要素を中心に、男女の恋物語として読解して行こうとするのを、研究の世界では「女読み」などと読んでいる。一方、『源氏物語』には宮中社会の社会秩序や、皇族政治家としての源氏の勢力拡大の経緯が丁寧に記されており、それらを中心に読み取る読みのことを「男読み」と呼んでいる。名

称の不適当さはともかく、この授業は、通常高校の現場では見られない「男読み」の可能性を模索したものといえよう。従来このような読みが、高校の現場で十分に教えられてこなかったのはなぜか。恐らく、当時の宮中貴族社会が身分制度に拠っているため、昨今の高校生たちにはすぐに納得することができず、自然と恋の物語として理解してしまうからであろう。しかしながら、身分の差の存在は、古典文学を読む際に絶対に無視することが許されない、重要なポイントである。この桐壺の読解に限らず、今後古典文学を読んでいく上で、重要な視点を学生たちは手に入れたことになる。桐壺の巻についていえば、周囲の男性貴族の反応が、この二人の恋が単なる気持ちの問題に留まらず、社会全体の重要事となっていたことを物語っていることを読み取らせたい。その際のキーワードが「あいなし（＝関係ないのに）」であった。語り手は男性達には関係のないことだと述べているが、そのことがかえって、この事態が宮中に留まらず男性貴族社会にまで関わる問題だったことを示しているのである。

4　考察と課題

「ドラマde古典」の冒険を終えた学生たちのコメントを水野の「事例媒介的アプローチ」（水野、2000）により、圧縮版テクストにし、セグメント化した後、アイディアを生成し練り上げながら「主要なカード」を考察したところ「3層の入れ子構造」が浮上した。

第一層は、学習者自身の学びの振り返りで、何を感じ、何を学んだかが中心となっている。「今まで私は古典といえば、文法ばかりで苦手意識が強かったのですが、「竹取物語」を**フリーズフレーム**で行い、天の羽衣を着る直前の私に、先生がタッピングし「今の思いは？」と聞かれたとき、「忘れることがつらいです」と言いながら、涙がでて、自分でも驚きました。姫の思いに初めて気づいた瞬間でした」「あなたは、何を残しますか？**ホットシーティング**のみんなの語り、一つ一つが感動でした。平忠度にとっての和歌は、彼自身の生きた証、彼のレゾンデートルであったこと、強く感じました。それは、「山月記」の李徴にも通じる気がしました」「源氏物語の**インプロ・ドラマ**や**ホットシーティング**を通して、女の嫉妬、宮中での人間関係をリアルにカラダで感じ考えることができました。事実には嘘でしか表現できないリアルがあると信じた、紫式部はやはり天才です」

第二層は、自分だけでなく、ドラマ手法を通したワークで、参加者同士の関係性がどう変化していったかのふりかえりが中心で、他のメンバーが何を発言し、どう動き、互いの関係がどう変化したか、自分と他者、感性・論理、身体と言語、さまざまなモードをチェンジする中で、ふりかえりが深まっている。「**ドラマつくり**の中でみんながいろいろな視点から意見をいうのが興味深かった。男は罪悪感を持っていたのか、男の妻は本当に一途な女であったのか、なぜ高安の女は嫌われたのか、解釈の違いを現代風にリメイクするためのアイディアは、一人では絶対思いつかないものだった」「海月の骨のミニドラマで、それぞれのチームの人物像の解釈が、生の声・動きで、ストレートに伝わってきた。隆家をラップで演じたチーム、ディープインパクトだった。伝わる工夫のロールモデルにしたい」「**架空実況**で、舞さんが、父母の名前を呼び続ける男の子を紹介したとき、3・11と重なり泣きました。方丈記の京都の町は、そっくり私の故郷だったから」

第三層、自身が教師として、授業を行うとしたらという、教師の視点に立つふりかえりである。この層では、授業の進め方、使われた技法、その効果についてのコメントが中心となっている。「私が、**ティチャー・イン・ロール**を使って語り始めたら、教室が普通と違う空気になって、みんなが更級世

界の人のように本気でやり取りに参加してくれ感激した。私は表現力がないから不安だったが、教師が本気で役になりきれば、生徒を架空の世界に導くことができる、そんな可能性を感じた」「**CM手法**を使い〈虫愛づる姫君〉の魅力を探究し、アピールの方法を考えるのは最高にワクワクのクリエイティブ体験だった、いろいろな物語の魅力を伝えるプレゼン技法として、生徒たちに、このCMつくりチャレンジさせたい」「当事者に「なること」ではじめて気づくこと、**ホット・シーティング**は優れものの技法だと思った。答える生徒も、質問する生徒、双方の、想像力・創造力・論理力を養うことができると思った」

ドラマ手法で古典授業を行うことは、他者との相互交流を通し、共同の意味の創出を行う活動である。想像力で、古典世界を描き、身体活動を通して、古典世界をリアルに創造してみせようとするとき、ドラマ手法は、想像世界を深める道具であると同時に、その内容を創造する媒介でもあった。そのプロセスのなかで、学生たちは、自身の経験・他者の経験を「物語る」中、「本質的な意味」を見出そうとする作業も行っていたのだ。

「ドラマ世界を生きることは、今の生き方を見つめなおすトレーニングでした」学生たちの語りを力に、リスキーでプレイフルな「ドラマde古典」の冒険、フットワーク軽く、続けていきたい。

【参考文献】

青木幸子（2009）「語りを軸とする《共創教育》創出に関する研究」九州大学大学院芸術工学府学位論文

青木幸子（2011）「ドラマ手法を用いた小説読解の研究」跡見学園女子大学文学部『コミュニケーション文化第5号』pp.43–pp.49

青木幸子（2013）「ドラマ手法を用いた古典教材のレッスン」跡見学園女子大学文学部『コミュニケーション文化第7号』pp.23–pp.33

青木幸子（2014）『物語が始まるとき』春風社

青木幸子（2015）「絵本かないくんをめぐる冒険」『昭和女子大学現代教育研究所紀要第1号』pp.9–pp.18

水野節夫（2000）『事例分析への挑戦』東信社

渡部淳＋獲得型研究会編（2010）『学びを変えるドラマの手法』洵報社

渡部淳＋獲得型研究会編（2014）『教育におけるドラマ技法の探究』明石書店

渡部淳＋獲得型研究会編（2015）『教育プレゼンテーション』洵報社

【謝辞】

本研究はJSPS 科研費JP19K00530 の助成を受けたものである